



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

一陽 ICHIYO RAIFUKU 来復

光陰矢の如し、
そして心機一転

退任に当たり、月並みではあるが、長いようであり、また、目睫の間でもあった記念館での5年を振り返ってみた。

今年一年目は、今秋開館30周年を迎える「本館」単独での活動の最後の年。龍馬はもとより、記念館の運営についての知識なども皆無と言っている中で、いろいろな取材や講演の依頼などがあつて、大いに困惑したことが記憶に新しい。また、年度末の高知城歴史博物館の開館式典に参加させていただいた折に、やがて訪れる記念館のリニューアル・オープンの日を想って、さあどうしよう、上手くいくだろうかと、漠然とした焦りと不安を感じたものである。

休館しての2年目は、新館の建設や本館の改修が進んでいくのを横目に、お隣の「桂浜荘」に事務室を置かせていただいた、再スタートに向けた準備を進めたが、県下の文化施設の多くが幕末維新博で活躍する中での出番無しで何となく寂しくもあり、また、腰が落ち着かず。一方で、リニューアル・オープン前の広報の機会をどうぞということもあつてか、講演や寄稿の依頼が度々で齟齬、冷や汗が止まらず。これらは何度やつても苦手で慣れることはなかった。

そして、いよいよリニューアル・オープンを迎えた3年目。盛況のうちに、7月には平成33年の開館から400万人目となる入館者の方をお迎えし、9月には、入館者が10万人を超え、年度末までには、久々の20万人台の入館者数を記録することができた。2年目となった幕末維新博のメイン会場としての役割を何とか果た

すことができて一安心といったところ。ただ、好事魔多しの譬どおりか(？)、新しく設置した展示ケース内の空気環境が整わなかったため、秋に予定していた重要文化財に指定されている龍馬の数々の書簡などの展示が叶わず、本格的な博物館へと生まれ変わった記念館に対する皆様の期待を裏切ってしまったことは痛恨の極み。自らの経験不足と不勉強を猛省する日々が続いた。

5月に「令和」の時代を迎えての4年目。リニューアル後の恒例となった企画展のテーマに沿った第一線の研究者の方々をお招きしての講演、そして、龍馬と同時代を生きた様々な人物に的を当てた連続講演会などを順調にこなしながら展示環境の改善に取り組み、10月には、文化庁や京都国立博物館のご支援とご協力をいただいた、前年からの宿題となっていた重要文化財の数々を展示する特別展を開催することができた。このことで、龍馬関係の「本物」の史料に触れていただく機会を大きく増やすという、施設整備の目的の一つをクリアすることとなり、勇退を表明されていた尾崎前知事をお迎えした開展式で、ホッと安堵の息を吐いたのが昨日のことのように思い出される。

この後5年目にかけては、ご承知のようにコロナ禍のもとでの日々である。休館や入館制限などを余儀なくされながら、また、入館者が激減する状況ではあったが、「柳に雪折れ無し」で、企画展や講演会な

どを着実に進めていった職員の努力を評価したい。

さて、5年前の着任の際、この誌面で「わがなすことは、われさへもしらず」「愚直に前へ進んでいくことを旨として」などと格好を付けてみたものの果たしてどうであったか、甚だ心許ない。それにしても、この間、様々な局面で、記念館の成長に向け、ご指導・ご助言をいただいた全国各地の龍馬会や研究者の皆様をはじめとする龍馬を介した数多の方々との出会いは、私にとって何にもまして得難い財産であり、心から感謝申し上げたい。

新館長のもと職員一同心機一転、「龍馬の殿堂」たらんことをめざして、長い航海を続けていく記念館に対して、変わらぬエールをお送りいただくようお願いして、筆を擱くこととする。

前館長 高松清之



初めて重要文化財を展示した特別展「維新十傑」展の開展式



開館30年

企画展を貫くテーマは

「つなぐ」

過去(歴史)から現在(現代)、そして人、未来へと

「坂本龍馬」をつないでいく使命

記念館オーブンは平成3(1991)年で、今年度で30周年を迎えた。時代は20世紀から21世紀、そして令和へと変わった。新館ができてから4年目ともなり、大きな節目を迎えたといえる。

開館当初は所蔵資料も少ない中、当時の学芸担当者の努力と工夫が龍馬発信の基礎を作った。「龍馬の手紙を一点でも多く紹介する。各地の所蔵者のご協力を得て複製を作ろう」と、小椋克己・初代館長時代から作成してきた龍馬書簡の複製も50数点となった。複製といっても、正倉院文書の複製と同様の伝統技法によるもので、真物と遜色ない。また寄贈寄託等によって龍馬書簡の真物も7点となり、当館では現存する龍馬書簡の過半数を保有し、常に一定数を展示紹介している。そんな書簡にある龍馬の言葉は、人々の目に触れ心へ伝わり、これからの未来へとつながっていくであろう。

30年に亘り、当館では坂本龍馬のみならず、龍馬をめぐる人々や幕末という時代などへ様々な角度からアプローチしてきた。近年学芸員は4人となり、各人の個性や専門分野によって企画展の多様性が増したのではないかな。なお更にこれからも充実し発展させていかなければならない。それが、龍馬と共に進んでいく我々の使命であるからだ。

さて、今から150年前の明治4(1871)年、朝廷の意向で坂本龍馬の遺跡を甥の高松太郎(のち坂本直)が相続した。直亡き後、その息子・直衛が三代目となるも独身のまま亡くなったため、坂本龍馬家は20年間断絶する。それを昭和16(1941)年、太郎の弟で龍馬の実家を継いだ坂本直寛の長男・直道が継いでいる。直道は昭和2(1927)年から14年間パリに在住し、南満州鉄道(満鉄)ヨーロッパ所長として、不穏な状況下のヨーロッパと日本の関係改善に尽力した。

直道の一人娘で龍馬家五代目の寿美子さんは大正10(1921)年生まれ。今年1月、静かに天寿を全うされた。

寿美子さんはフランス仕込みの高潔な女性で、直道・万寿夫妻と共に時代の大きなうねりを見てきた。「私のこと? この家に生まれた運命だわ」「龍馬がいたらこんな世の中じゃなかったはずよ」というのが口癖だった。100年を生き、貴く稀有な存在であった。

そんな30周年に行う企画展を貫くテーマを「つなぐ」とした。龍馬とつながる時間や空間、人々を資料を通じて紹介していく。

第1回「海援隊士・高松太郎」展は、前述の龍馬の甥で龍馬家を継いだ太郎についてである。次に掲載のある担当学芸員の紹介文に詳しい。

第2回「坂本龍馬記念館の軌跡―出合いの奇跡をたどる」展は、まさに記念館30年の軌跡である。当館保有の龍馬書簡7点や龍馬佩刀をはじめとして多く展示。当館に収まるそれぞれの資料にある奇跡的ともいえる出合いの物語も紹介する。

年度後半は、第1部と第2部で構成する特別展「龍馬と北の大地」展である。龍馬以前および龍馬が生きた時代の蝦夷地から、明治2(1869)年に北海道となつて以降の、龍馬と北の大地のつながりを、探索と開拓を中心に考える。

第1部「蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士」では、北の大地・蝦夷を幕末以前から辿り、幕府や諸藩の施策、龍馬と志士たちを考える。蝦夷地に精通した伊勢出身の松浦武四郎をキーパーソンに、未開の大地に向けられた龍馬らのまなざしとその先に見えるものを探究する。

第2部「北海道で「龍馬」生きる―チョコッコウさん再び」では、北海道に渡った坂本一族の中で、15年ぶりに坂本直行を再考する。子孫でありながら龍馬を語ることなく、過酷な原野で開拓民として生きた直行の半生と、今なお多くの人から愛される野の花々や十勝原野の風景など、直行の絵画を紹介する。

1年間の企画展を通じて、龍馬に近い人々や資料、事柄を手繰り寄せ、これからもより明確に龍馬を次代へとつなぐ記念館の在り方を探っていくたい。

前田 由紀枝

開館30年／令和3年度企画展

◆「海援隊士・高松太郎」展

4月17日(土)～6月22日(火)

◆「坂本龍馬記念館の軌跡―出合いの奇跡をたどる」

7月6日(火)～9月14日(火)

■特別展「龍馬と北の大地」展

◆第1部「蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士」

10月5日(火)～12月3日(金)

◆第2部「北海道で「龍馬」生きる―チョコッコウさん再び」

12月16日(木)～令和4年4月3日(日)

*前期12/16～2/6 *後期2/10～4/3 (一部入替有)

令和3年度 企画展

「海援隊士・高松太郎」展

会期 令和3年4月17日(土)～6月22日(火)

高松太郎(坂本直)は龍馬の甥であり、海軍修業時代から海援隊に至るまで、龍馬と行動を共にした人物として知られている。長男である兄の権平が継いだ郷土坂本家とは別に、横死した龍馬の跡が絶えることを憂いた朝廷の意向により、坂本龍馬家を継いだ人物でもある。当館では平成29年度、坂本直の手元にあつたと思われる文書100点余りの寄贈を受けた。概要は当館研究紀要創刊号で紹介しているが、今回の企画展は、その坂本直資料を本格的に披露する初めての展示として開催するものである。坂本直資料は、そのほとんどが太郎を受取人とした書簡類であるが、いくつか展示の目玉となる資料を紹介したい。



写真1 高松太郎 明治2年撮影
(安田町教育委員会蔵)

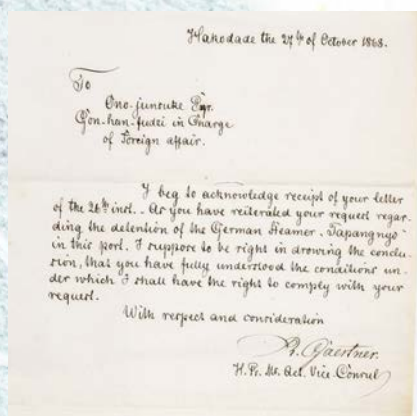


写真2 R. ガルトネル英文書簡

① 廣井鑒之助書簡 高松太郎・新宮馬之助・千屋虎之助宛 文久3年推定12月6日

廣井は勝海舟や龍馬らの協力を得て、文久3年6月、泉州で父の仇討ちを遂げた人物。この書簡は仇討後、土佐に帰った廣井がその後の様子を太郎らに知らせたもの。廣井の仇討については、勝海舟日記など他の文

書にも記録が見られるが、本人直筆の書簡はおそらく今回初めて世に出るものと思われる。

② R. ガルトネル英文書簡 小野淳輔宛 1868年10月27日(写真2)

太郎(当時の名は小野淳輔)は慶応4年閏4月、箱館裁判所権判事となつて外交事務を担当することとなった。R・ガルトネルはロシアの商人で、同じくロシアの在箱館副領事であつたC・ガルトネルの兄。この書簡は英文で書かれ、慶応2年に幕府が買い上げたタパングニョー号の取り扱いに関するもの。坂本直資料には箱館裁判所時代のもものが散見される。

明治4年、太郎は龍馬の跡を継ぎ、名を坂本直と改める。差出人の坂本直寛は太郎の実弟で、伯父・権平の養子になった習吉。直寛は民権家としても活躍し、明治31年、一家で北海道へ移住した。この書簡は直の養子について、また乙女と思われる「叔母様」の容体について記した、家族ならではの手紙である。

本展では他に、太郎のふるさとである安田町の協力を得て、太郎の父・順藏(龍馬の姉・千鶴の夫)の資料などを展示予定である。

亀尾 美香

③ 坂本直寛書簡 坂本直宛
明治12年推定8月18日

特別展

「薩摩と土佐」

——雄藩がたどった近代化の道——展を終えて

新型コロナウイルス感染拡大の影響をまともに被った令和2年度特別展が、昨年12月13日に終了した。春先の緊急事態宣言時には東京方面への調査出張で制限を受け、入場者は前年同時期開催の特別展よりも1万人以上の減となった。



展示室

年に一度の特別展として、本展では重要文化財を借用・展示するという目標があり、当初から、重要文化財に指定されている大久保利通の資料を展示したいと考えた。また薩摩とは、坂本龍馬はじめジョン万次郎や高見弥市（大石団藏）らの土佐人も深い関わりをもったことから、テーマを「薩摩と土佐」に設定した。大久保利通のまとめた資料は、令和3年3月現在で、①鹿児島県歴史・美術センター黎明館（以下、黎明館）蔵の重要文化財1650点、②国立歴史民俗博物館（以下、歴博）蔵の重要文化財3053点、③歴博蔵で重要文化財でない一資料群の計三資料群がある。本展では②から2点、③から1点を借用・展示したが、大久保が「非義の勅命は勅命にあらず」と述べた、幕末政治上非常に重要かつ有名な書簡（慶応元年9月23日西郷隆盛宛）は重要文化財でなく、③に含まれる資料であった。また、文言に訂正のある

「薩土盟約書」を歴博から、これと酷似した筆跡で清書と思われる別の「薩土盟約書」を黎明館（玉里島津家資料）から借用・展示したが、訂正の入っている前者の方が重要文化財であった。資料群の分かれ方や収蔵された時期などにより、文化財指定にも複雑な違いが生じている現状を、展示の必要から調査を行って初めて知ることができた。

薩摩藩のような「大国」に正面から取り組むことは、坂本龍馬との関係上避けられないこととはいえ、自分には荷が重くいささか気おくれがした。実際、掘れば掘るほど多くの事象や資料が見つかり、政治状況の複雑な部分では消化しきれなかったり、大きな見落としをした箇所などが課題として残った。これらはいずれどこかで解消することにしたが、薩摩が「大国」である理由、薩摩が薩摩一国のみならず、日本そのものの近代化を強力に牽引するリーダーたりえた理由を、いくつか感

覚的につかめた気がする。学芸員として初めて重要文化財を借用・展示する機会を得られたことと同様、今回の展示で得られた大きな成果である。

今回も、各地の資料所蔵機関と職員の方々、および資料を所蔵する個人に多大なご協力を賜った。こうした状況下でありながら快く資料をお貸しください、さまざまに便宜を図ってくださいとしたことを、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。

亀尾美香

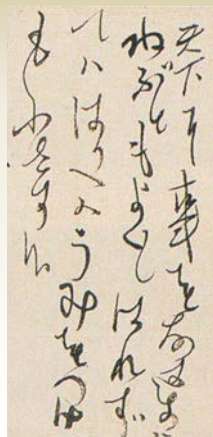


鹿児島から2度目の里帰りを果たした龍馬書簡

龍馬の手紙

10

「ねぶと」の手紙



高知城歴史博物館は龍馬の手紙を2通収蔵している。うち六月二十八日付乙女宛のものが、山内家資料の中の一通だ。箱には文久年間とあるが、現在では元治元年とする見方が有力らしい。

暗喩を多く含む意味深な手紙の内容はさておき、ここではごく個人的な話、当館前身の土佐山内家宝物資料館前館長、故・山田一郎氏との思い出話をしたい。館長室で何の話をしていた時だろうか、龍馬の手紙の話題になり、「「ねぶと」はね、土佐弁で「腫れ物」のことなんだよ」と教えられた。採用初年度、高知へ来たばかりだった私は「そうなのか」と素直に聞いていたのだが、部屋を出てから周囲に「普通言わないよ」と訂正された。

それで席にもどり、副館長（当時）に借りていた『土佐方言集』を引いてみた。「ねぶと」はない。しかしこの手の言葉は辞典にないこともあるだろう。もやもやしたまま、次に聞く機会をうかがうことにした。

数ヶ月後、再びチャンスがめぐってきた。私が「館長は腫れ物を「ねぶと」と言うのですか」と聞くと、「言わないよ」とあっさり一蹴。その上で、龍馬の手紙の「ねぶと」を腫れ物と解釈するまでに至った取材の苦労話を聞かされた。滔々と語られた内容は、あまりに長大で何も覚えていない。そうなのか、とぼんやり思い、それきり長年そのままにしていた。

だが今回、試みに『日本国語大辞典』を引いてみたら、なんと普通に立項され、「おできの一種」と解説が載っていた。土佐弁ではなかった。

思うところはなくもないが、それも含めて「ねぶと」の手紙は、私にとって山田氏との思い出の縁だ。ろくな相づちも打てず、コーヒーを前にどうか館長の話聞いていた、あの頃の記憶とほぼ同義なのである。

（高知県立高知城歴史博物館

藤田雅子
学芸課長）

私の
おすすめ

No.10

龍馬と同時代を生きた 130人の写真が一堂に 「幕末写真館」

人物記念館である当館の観覧ルート終点は、本館地下2階「幕末写真館」です。

太平洋を望む上階の解放感とは対照的に、静けさ漂うモノトーンの無機質なフロア。足を踏み入れると、視界に飛び込んでくる顔、顔、顔！それは龍馬と同じ時代を生きた人々。

130人もの実寸に近い顔写真（一部は絵）が並ぶ様は圧巻。これほど揃って目にすることはありそうでない、そんな空間です。

写真技術が日本に伝わったのが幕末期。有名な幕末史の主要人物から、知る人ぞ知る人物まで、一人一人の説明を読みつつ写真の顔の目鼻立ちや表情を見つめてみると、対面しているような感覚にもとらわれ、その眼差しが強く印象に残ります。

壁面に大きく写した龍



撮影スポットで龍馬さんと記念写真をどうぞ。

馬ゆかりの地の写真は、町並みがまるで眼下に広がるような、洋館の庭の人物が今にもこちらに手を振りするような、臨場感ある風景です。

龍馬の写真は有名ですが、兄・権平、姉・乙女、姪・春猪が家族の写真もあり、龍馬の面影が感じられます。妻・お龍の晩年の写真は、龍馬と共にあつた若き日の美しさを思わせます。

私が気になるのは、お龍を京美人と評し、龍馬がお龍に贈った帯留めを譲り受けた中城仲子の美しすぎる面立ち。武市半平太の愛妻・富の老いてなお凛とした佇まい。この2人の女性に心惹かれます。

また、「妙な男」「妙な女」と互いを評し合った龍馬・お龍夫妻のエピソードも、お龍の回顧録から抜粋し紹介しています。

ご観覧後はフロアで唯一撮影可能なスポットで、ぜひ龍馬さんと記念撮影を。

手島ゆか

世界に新型コロナウイルスが蔓延して1年以上が経ち、人々の生活が一変する中、博物館も様々な対策を行い、来館者や職員の安全に配慮している。そこで本稿では、コロナ禍で気になる当館の空調の仕組みについて紹介したい。

1回目の緊急事態宣言以降、激減していた来館者数も、Go Toトラベル事業が展開されていた昨年には回復し、例年と同じくらいの数になっていた(3月1日現在、2回目の緊急事態宣言により来館者は再び激減中)。来館者の多い日に展示室入口付近で入室の整理を行っていると、何度か「館内の換気はどうなっていますか」と質問を受けたことがある。通常、どこの博物館でも窓を開け放している館は少なく、当館も同様である。特に当館は海辺の博物館で塩害を受けやすいため、そもそも窓がほとんど無い。そのため換気について不安を感じるのは当然である。本館と呼んでいるガラス張りの建物は、平成3(1991)年の開館で、今年が30周年となり、茶色の建物の方は新館と呼んでおり、平成30(2018)年に開館した。博物館は可能な限り、展示室など建物全体の温湿度管理をできる方が望ましく、その上で密閉された展示ケース内の温湿度管理を行う。当館の場合、本館は細かい温湿度管理が難しいが、

新館は可能になっている。そのため資料は新館の方で保管・展示するようになっている。

室温は冬期22℃、夏期23.5℃に設定し、湿度は55%を維持するように設備担当の方が奮闘している。海辺の建物では、南からの海風の時と、それ以外の方向から風が吹く場合で、外気の湿度が大きく変わるため、同じ数字を維持するのはかなり苦勞するものだ。

外気を取り入れなければ、温湿度を一定に保つことは簡単だが、当館は比較的に来館者の多い館であるため、外気を取り入れなければ、人の呼吸等で二酸化炭素濃度が上がる。また、新築の館は、新築の家と同じで有機酸やアルデヒド類、アルカリ性物質などの有害物質が出るため、常に外気を取り入れながら換気を行っている。

しかし、外気を多く導入しすぎると、温湿度の一定管理はできなくなるため、展示室内に吹き出す風の最大30%までが外気で、残りは循環させた空気を使う。展示室に送り込む空気は、地下1階の空調機内にある複数のケミカルフィルターを通して有害物質を除去するため、かなり綺麗な空気になる。ケミカルフィルターは2種類あり、どちらも高精製活性炭に薬品を添着したものを使用している。こうして常に綺麗な空気を室内に送り込みながら温湿度を維持する仕組みとなっているため、一見すると閉鎖的な空間だが、新館の展示室内はかなり清浄な状態に保たれている。

そして、新館展示室の空調は天井から緩やかな風が出ており、両サイドのウォールケース下に引き込む仕組みであるため、細かな飛沫が飛んできたとしても、落ちやすい構造になっている。ただし、ロビーは壁際の床から上向きに風が出ているし、本館は横から風が吹き出す構造になっており、統

一されていない。

また、本館は新館ほどの空調設備が整っていなかったが、現在は新たな空気清浄機を導入している。

来館しつづも空調のことを気にされていた方がいるように、コロナ禍で閉鎖空間である当館へ足を運ぶのはためらわれるものだ。しかし、当館は常日頃から外気を導入して換気を行っていることをこの機会に知っていただければ幸いである。

それでも人が密になる状態は避けねばならないため、気兼ねなく来館いただけるのはまだ先のことになりそうだ。



新館・常設展示室



令和2年度

連続講演会報告

令和2年度のテーマは

「幕末再考―変革への計と践」

恒例事業として定着した感のある「連続講演会」も3回目となりました。今年度は「幕末再考―変革への計と践」と題して開催いたしました。

坂本龍馬が活躍する「幕末」という時代は人気が高く、テレビドラマや映画、小説などでもしばしば取り上げられています。教科書で習う大事件や有名な人物などを中心とした、いわゆる「幕末のイメージ」を持っている方も多いのではないのでしょうか。大きな出来事だけで歴史が進むわけではなく、様々な人物や出来事が絡み合いながら進んでいくのだと思います。また、どの立場から見ると、歴史の見え方は変化します。今回の連続講演会では、激動の時代を動かしていった組織、人材、考え方などに着目し、「幕末」を別の視点から考える機会にしていきたいと考え、

5人の方にお話しいただくこととしました。

朝廷の存在が注目されてくる幕末期の朝幕関係について、非常に詳しく紹介された第1回目「幕末の朝幕関係―特に朝廷の視点から―」から始まり、第2回目では、薩長土肥のひとつである佐賀藩が幕末に示した存在感について当時の藩主鍋島直正を中心にした内容を、第3回目は、「幕末維新期」そのものを伝え残すことに尽力した田中光顕の業績を、そして第4回目はあまりよい印象のないと言われる長州藩主・毛利敬親について、それぞれたくさん資料をご紹介いただきながら、お話しいただきました。ただ、最終回の「幕臣小栗上野介のビジョン」は、新型コロナウイルス感染症の再流行に伴う緊急事態宣言が出されたことなどから、残念ながら中止となってしまいました。ご講演はかたがたでしたが、講師の高橋敏先生には特別寄稿をいただき、今後

発行予定の「講演録」に掲載いたします。

（講演録は5月頃に発行予定で、ミュージアムショップにて販売いたします。）

今年度の「連続講演会」では、珍しく（？）ほとんど龍馬が登場しませんでした。県立坂本龍馬記念館なのに…と思われる方もおられるかもしれませんが、龍馬をより深く知るためには、彼自身についてはもちろんですが、それだけではなく、彼が生きた時代や社会、様々な立場の組織や人物について知ること、も不可欠だと考えています。これからも幅広い視点から「坂本龍馬」と「龍馬が生きた幕末」を考えたいと思います。

令和3年度の「連続講演会」は開館30周年記念とし、30年の間に進んだ坂本龍馬に関する研究成果のご紹介をテーマにする予定です。どうぞご期待ください。

河村章代



12月12日(土)
「毛利敬親の藩政改革」会場風景



8月29日(土)
「幕末佐賀藩の近代化と鍋島直正」会場風景



10月24日
「志士最後の生き証人」田中光顕の功績」会場風景

	月日	演題	講師
1	6月27日(土)	幕末の朝幕関係 ―特に朝廷の視点から―	高山嘉明(当館学芸員)
2	8月29日(土)	幕末佐賀藩の近代化と鍋島直正	藤井祐介氏(佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員)
3	10月24日(土)	「志士最後の生き証人」 田中光顕(みつあき)の功績	藤田有紀氏(佐川町立青山文庫学芸員)
4	12月12日(土)	毛利敬親の藩政改革	小山良昌氏(公益財団法人毛利報公会毛利博物館顧問)
5	2月27日(土) (中止)	幕臣小栗上野介のビジョン	高橋敏氏(国立歴史民俗博物館名誉教授)

■「記念館の冬 静かな海と“京の軌跡”」から開館30周年に向かって

4月4日に終了する「記念館の冬 静かな海と“京の軌跡”」は、坂口澄夫さんからご寄贈いただいた69点の写真「龍馬 京の軌跡」より、21点の作品を冬の時季の静かな海と共にご覧いただきました。会場では、京都の撮影場所を掲示した地図を確認しながら熱心に写真をご覧になっている方を見かけました。

プロデューサーでありフォトグラファーである坂口さんが、ファッションカメラマンの視点から龍馬を表現された写真についてお伺いした話の中で、印象に残った事柄がいくつかありました。

まず、写真を撮影するにあたり龍馬についても色々と知識を得、史実をリアルに表現するだけではない工夫をされたということ。そして、制作作業にあたってはデジタル加工を一切せず、特にプリントの色合いにこだわりを持って制作されたということ。その手作業の中で、龍馬の感覚を疑似体験されたと言われたことが深く印象に残りました。

真白の壁に展示された写真は、プリントに写し出された対象物の奥にあるものを想像させる色合いになっており、ぎゃらりいに差し込んでくる冬の光と相俟って、独特な表現の世界観を見せてくれました。また、龍馬とお龍のイメージを坂口さんの原点でもあるファッションと結びつけ、現代のモデルを通し表現した写真は、本当に楽しい撮影だったそうです。それらの機微が窺える「京の軌跡」は、イメージと人間像を盛り込んだ坂本龍馬へのオマージュとなった展示ではないかと思います。

さて、開館30周年を迎える今年、記念館では様々な企画が開催されます。その中で“海の見える・ぎゃらりい”では、NHKの大河ドラマをテーマに、ドラマの中で演じられた龍馬の資料などの展示や、30周年を振り返った重大ニュースの展示などの展覧会を予定しています。皆さまと共に迎える坂本龍馬記念館の30周年、気持ちも新たに、少しでも皆さまの心に残る展示が出来るよう心掛け、目指していきたいと思っております。

中村 昌代



展示風景 1



展示風景 2

入館状況

2021年3月20日現在

(1991年11月15日開館以来 29年125日)

◆入館者数 4,356,447人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 419,687人

編集後記

4月1日付で館長が交代しました。リニューアルオープンをはさんだ5年間の激務に耐えてこられた高松館長、本当にありがとうございました。新館長には、これからの龍馬記念館を力強く牽引していただきますよう、よろしくお願いいたします。

開館30年を迎える本年度は、さまざまな企画を準備しています。詳細が決まり次第お知らせしていきますので、どうぞお楽しみに。(か)

館だより“飛 騰”第117号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般 500円(企画展開催時 700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

私のテーマ

万次郎と龍馬



ジョン万次郎研究家
北代 淳二

万次郎の帰国と龍馬

漂流によるとはいえ、鎖国の禁を破って海外に居住したとして、幕府の長崎奉行所で取調べを受けた万次郎と伝蔵、五右衛門兄弟は、無罪放免となり、故郷に帰って来た。

土佐藩から送られた役人たちに連れられて、高知城下に着いたのは嘉永5年（1852）7月11日。アメリカから琉球南端に決死の上陸を果たしてから1年半ほど経っていた。14歳で漂流した後、10年の異文化体験を積んだ万次郎は今や25歳の若者である。

高知城下に入った道筋には久しぶりに帰国した漂流民を見ようと人垣ができた。

坂本龍馬の生家はその道筋である本町筋一丁目にあったが、龍馬が万次郎たちの行列を見たという記録はない。龍馬は天保6年（1835）11月15日生まれで、万次郎より8歳年下である。この年、自宅からほど遠からぬ築屋敷3丁目の日根野弁次に師事して小栗流剣術を修業中だった。

万次郎たち3人は、東堺町の旅亭松尾屋に泊まった。長崎奉行所で既に国禁を犯した罪は晴れているので、高知では取調べではなく3人の海外体験の聞き取りが行われ、二つの文書が作られた。『漂客談奇』と『漂異紀畧』である。

帰国後のこと

『漂客談奇』は当時の土佐藩主山内容堂が大目付の吉田東洋に命じて万次郎らの聞き取りをさせたもので、生憎東洋が病氣だったため、配下の吉田文次がこれに当たった。この書は藩上層部の必読の書となり、他藩の大名にまで写本が提供されたという。

『漂異紀畧』の方は、当時新進の画家で学者だった河田小龍が、万次郎ら3人の体験を聞き取ったもので、得意の絵筆を振るった挿絵が多く入っているのが特徴である。

小龍は『漂客談奇』の聞き取りを手伝いながら、万次郎を自宅に住ませ、日本語を教えると同時に、万次郎から英語を学んだという。小龍は万次郎より3歳年長である。

『漂異紀畧』の原本はいまだに見つかっておらず、写本が10種類ほど現存するだけだ。

安政地震（1954年）のあと、龍馬が小龍を訪ね、のちの海援隊のアイディアを得たという記録があるが、その中に万次郎の名前は出て来ない。

10月初めにやっとそれぞれの故郷に帰った。

万次郎が中ノ浜に帰り母親と12年ぶりの劇的な再会を果たしたのは、嘉永5年（1852）10月5日のことである。ところが再会の喜びも束の間。3日後に、高知に帰れとの藩命が届いた。万次郎が持ち帰った世界地図の地名などの翻訳が仕事だった。そして万次郎は「御小者」として土佐藩に召し抱えられた。「小者（こもの）」は武士の最下級だが、漁民から武士へと異例の登用である。

万次郎と龍馬は出会ったか？

嘉永6年（1853）6月、ペリーの黒船来航で日本の情勢は一変する。開国要求の大統領書簡を残して黒船が去った直後、老中の阿部正弘は万次郎を江戸に呼んで、幕府首脳にアメリカ事情を説明させた。そして万次郎を土佐藩から引き抜いて幕府直参のご普請役格とし、江川太郎左衛門（坦庵）の配下に置いた。

江川は万次郎をペリー再来日時との交渉の通訳にさせる意向だったが、水戸の徳川斉昭の反対で実現せず、結局万次郎は幕府の対米交渉に一切関係しなかった。幕府の

中枢に、万次郎はアメリカが送り込んだスパイではないかという疑いが根強く残る。

日米和親条約締結後、開国から尊皇攘夷へと日本の情勢は目まぐるしく変わっていくが、万次郎と龍馬の距離が一番近くなったのは、龍馬が勝海舟の弟子になった文久2年（1862）10月のことである。海舟はその2年前、嵐の中の咸臨丸の渡米航海で、実質的な艦長役を万次郎にさせるなど、その実力を知りぬいている。龍馬を万次郎にひき合わせようとしたようだが、万次郎はその2年前に軍艦操練所教授を免職になっていた。二人の対面は実現しなかった。その後長崎で二人が近くに滞在したことはあるが、両人が会ったという記録は存在しない。



龍馬（32.3歳頃）



万次郎（48歳）中濱京氏所蔵

江戸期の「文武両道」と「医儒一体」

― 幡多沿岸の医儒と中村樋口道場を例として ―

寛政期以前の幡多沿岸の 医儒と高知城下

土佐藩主山内家は、転封前の文禄5年（1596）サン・フェリッペ号の浦戸漂着や、慶長5年（1600、関ヶ原合戦前）イングランド商館船リーフデ号宿毛沖經由豊後漂着、慶長18又は19年唐船清水来航時黒人が大筒を放したことから、2代藩主山内忠義は徳川家康から松平姓を賜り、幕府西日本沿岸警備体制の一翼を担う立場にあつて、幕府が奨励する朱子学が発展した。

高知・吸江寺から京に戻った山崎闇斎は垂加神道説を唱え、明暦元年（1655）堀川に闇斎塾を開いた。同時期長崎で和蘭商館医ドイッ人カスパルに学んだ嵐山甫庵、河口良庵、向井元升が京に転居。古方派医儒たちも紅毛流外科を学び研鑽を積み、宝暦4年（1754）山脇東洋（1706～1773）は腑分け実験に及んだ。寛政元年（1789 仏革命の年）9代藩主山内豊雍が重病に陥り、

幡多郡下田（現四万十市）で開業していた外科医甲杷瑞益を高知城下呼び寄せている。父の8代藩主山内豊敷は宝暦14年（1764）藩校「教授館」看板に「祖徠の説は邪中の邪なるものなり」と記した。

この頃、甲杷瑞益（1738～1803）は東洋と並び古方派四大家吉益東洞（長子南涯は華岡青洲の師）門下であつた。瑞益は高岡郡窪川（現四万十町）で生まれ、郷土史「仁井田郷談」を残している。樋口真吉の妻兼の祖父瑞益が幡多沿岸の医儒に与えた影響は真吉の幕末維新の糧となつた。

中村樋口道場設立と幡多 沿岸の医儒たち

文化5年（1808）4/19、6/24伊能忠敬一行が土佐沿岸を測量。同年8月仏第一帝政下ホラント王国となつた和蘭国旗を掲げた英軍艦フエートン号長崎入津事件の影響で、長崎警護及び開役の九州各藩では西洋技術受容も含む学問振興、文と武が強化された。土佐藩では文化5年に沿岸の甲

浦、津呂、須崎、与津、下田、清水、柏島、宿毛に大筒台が設置され、異国船が柏島浦に漂着した文化6年幡多奉行所足輕樋口信四郎が中村に剣「樋口道場」を開設した。

『幡多医師会史』の清水浦地下医師松川玄珠の項に、「文化六巳年右困窮の者共に施薬同然治療致し此の節地中他村共手広く療治せしめ殊に旧家の誤傍御表より御目見御赦免仰せつけられ同八末年御奉行廻見の節奇特の訳を以て銀一両被成遺之（文化11年『12代藩主山内豊資巡見記』とある。「文（医）」の評価に樋口道場の「武」の存在が不可欠であつた、当時の文武が伝わる。

また、樋口道場開設7年後の文化13年、宇和屋次左衛門（遠近鶴鳴）が大坂の篠崎小竹、京の岩垣東園に学び、文政元年（1819）私塾「鶴鳴塾」を中村に開設した。同年には幡多郡下ノ茅（現土佐清水市下ノ加江）の安光命三が華岡青洲塾「合水堂」に入塾している。安光家は京から一条家に従つた家譜を持つ。嫡男命三は先祖の地

土佐佐賀（現黒潮町）から下ノ茅に転居。樋口道場主娘（真吉姉・道）と結婚して代々続く医業を極めた。南學史に名を残す命三の従弟、安光南里は上川口（現黒潮町）から樋口道場に通つた。文化2年（1805）青洲が全身麻酔下乳癌摘出成功。文政7年シーボルト長崎着。文化文政期の華岡青洲塾土佐入塾者24名のうち幡多郡8名/高岡郡7名/吾川郡3名/安芸郡1名他。幡多沿岸と中村樋口道場の文武振興が判る。

坂本龍馬の義兄高松順蔵の弟高松涛亭が青洲の生地、紀州平山の「迎翠堂」に入塾した頃は、西洋医学受容も進み全国的に入塾者が急増している。

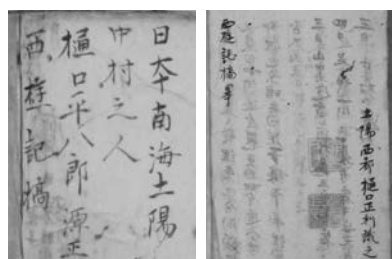
天保8年樋口真吉21歳の 九州廻国と「文武両道」

樋口道場主倅真吉21歳は物心付く前から義兄（医儒）や帰農した中村藩士末裔達の文武に育まれ、天保8年九州廻国に出た。アヘン戦争などの時代背景もあるが、直接



土佐史談会関東支部役員
樋口真吉玄孫
角田 慶子

的要因として天保5年宿毛藩主山内氏固が「講授館」を設立した事や龍馬の義兄の弟、安芸郡安田の高松涛亭が天保5年高知城下新町に開業した事（甲杷瑞益を藩主治療に呼び寄せてから45年後）が挙げられる。

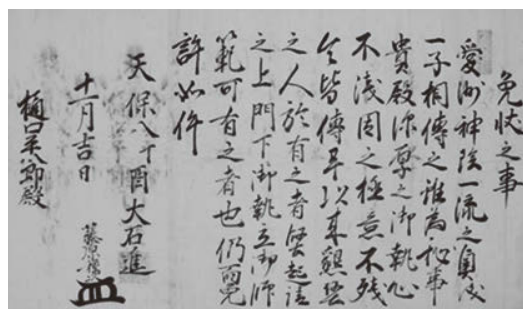


天保8年真吉日記は二冊ある。（四万十市郷土博物館蔵『樋口真吉関係文書1』）。左は試合の相手の名前等を記し、「日本南海土陽 中村之人 樋口平八郎源正利 西遊記稿」。右は歴史理解に基く旅の記録で製本の土押印があり「土陽西部 樋口正利識 西遊記稿畢」と其々記している。

沿岸部に比べ文化文政期中村の華岡青洲合水堂入塾者は唯一人。宿毛郷校も漢籍のみ。中村奉行所に西洋医術受容も含む「文武館」設立を希求した真吉青年21歳の不退転の決意が判る。

真吉青年は豊後上陸後、直ちに熊本藩飛地鶴崎の毛利空桑の朱子学に反する文（尊王）武両道塾を、萩の吉田寅次郎（松陰）が訪問する13年前に訪問している。空桑は四国幡多中村樋口道場主が無外流破門を選択したことを既に聞き及んでいた。父毛利太玄は熊本藩医。篠崎小竹の父も豊後で医を学んでいる。

「寛政異学の禁」で文は武を必要とした。篠崎小竹は中村樋口道場の武と繋がり、樋口家は小竹と頼山陽の関係等、豊後の医儒の交流を承知していた。



真吉は天保8年11月7日柳川藩大石道場で、江戸の幕臣道場を凌駕した大石進の大石神影流免許伝授を「固辞」して、幡多と先祖の歴史に繋がる「藤原種次」の愛洲神陰流免許皆伝書を「諾」。26日礼服神文に身を包み伝書を受け取っている。

12日伝書授与前、大石道場の主だった面々が久留米藩有馬侯の鷹狩に真吉を誘っている。中村藩2代藩主山内豊定の正室留里は、久留米藩2代藩主有馬忠頼娘。久留米藩と（幡多）中村藩等、真吉が歴史理解の上で大石神陰流伝書を固辞、愛洲神陰流伝書を諾した真意が伝わる。

また、真吉は天保8、11年何れも長崎鍛冶町の外科道具司広瀬九左衛門宅に泊まっている。

天保8年・文久2年迄の日記を『彬斎語』とし、華岡青洲に麻酔手術のヒントを与えた永富独嘯庵の著書『養語』等、医儒が齎した徂徠思想を理解している。

樋口真吉の幡多奉行所付属「文武館」設立嘆願前後

天保11年（1840）

名字帯刀庄屋になった宇和屋遠近鶴鳴は中村を離れ、真吉は鍋島直正（閑叟）の肝いりで改築された佐賀藩校弘道館や西洋技術受容の文と武を体験。弘化2年（1845）11月に幡多奉行所付属文武組織整備を嘆願。翌年篠崎小竹、岩垣

東園を訪問している。

弘化4年真吉は毛利空桑と再会。福岡藩城下の亀井塾で、『肥後物語』を記した亀井南冥の『論語語由』を複写。嘉永2年（1849）12月長崎で蘭訳家に会い高島砲術に入門。嘉永3年元旦砲学関係書物を複写している。

足軽真吉の武は藩命である砲術を含む。

また、正月8日には亀井南冥に学んだ広瀬淡窓を日田に訪問している。亀井学派を中村に導入するに当たり、庶民の金毘羅宮に掲げられた亀井昭陽の書を確認するなど多方面から調査検証している。

万次郎帰国と樋口真吉

中浜万次郎と幕府剣術指南役娘との媒酌人である江川英龍（1801～1855）が庇護した、神道無念流の斎藤弥九郎は儒学を古賀精里、兵学を平山行蔵、砲術を高島秋帆に学んでいる。

樋口道場主信四郎の墓碑銘撰文者斎藤拙堂と真吉の号命名者篠崎小竹は共に江戸昌平黌の古賀精里（佐賀藩士）に繋がる。高島砲術門下の真吉は嘉永5年

（1852）6月24日土佐の受取人が来る前日、漂客人万次郎と面談。28日高島先生へ暇を告げ、29日書を高島氏へ送り、10月6日江戸着。

12月20日土佐支藩「土佐新田藩」麻布藩邸に招かれ、嘉永6年1月6日佐久間象山塾入門後連日木挽町の象山塾に通い、26日には象山塾の帰り麻布新田藩邸を訪問。江戸からの帰路、大坂で道場門弟の弘田玄又が学んだ『合水堂』と『洪庵塾』を訪問している。

精密な砲台設計図を残す真吉は江川英龍の韭山反射炉の完成無くして砲台設置は無意味を知り、万次郎が持ち帰った西洋技術の文武を支持する。

また、万次郎幼少期の沿岸部では松川玄珠等が家塾を開き、住民に文字を教えていた。玄珠に疫学天文兵書等を学んだ中濱浦の池道之助は中村樋口道場に通い文武を極め、慶應2年中濱万次郎等の上海行に同道している。

終わりにかえて

嘉永5年10月長崎から江戸に到着した真吉（子文）に間崎哲馬（滄浪）が贈った漢詩

「龍虎欲飛騰」因賦贈子文伝

が残る。真吉は樋口道場に通った間崎哲馬の恩師である。

「腰下双剣長不勝 腹中龍虎欲飛騰 東海壯士挾之去 蹴破山河幾万層 以下略」

「蹴破山河幾万層」は斎藤監物が南北朝期の「児島高德」を詠んだ漢詩「踏破千山萬岳煙」を踏んでおり、真吉の文は主に歴史理解にあったことが解る。

「腹中の龍虎」とは、奉行所がある中村では実現難しい西洋医学、技術受容の文武両道のこと。

万次郎の帰国で漸く実現するであろう期待と、天保8年無外流破門を選択して九州廻国に赴いてから「文武館」設立実現のための苦闘がにじみ出ている。

参考資料

平尾道雄「土佐藩」
松方冬子「阿蘭風説書と近世日本」
鳥居裕美子「九州の蘭学・越境と交流」
華岡青洲顕彰会編「医聖華岡青洲」
中村真一郎「頼山陽とその時代」
下茅の歴史「土佐清水市図書館蔵」
「幡多医師会史」「憲章簿」
「宿毛市史大分県人名辞典」
川村敬二「亀井南冥小伝」
渋谷雅之「近世土佐の群像6 樋口真吉日記上」
松尾晋「江戸幕府の対外政策と沿岸警備」

こぼれ話 ― 犬歩棒当記 (四十五) ―

話の長い人

宮川 禎一

話の長い人はたいがい嫌われる。若い人からは「あの人は自慢話ばかりで、話は長いのに中身がないんだよな」などと思われるのがオチだ。そうならないように簡潔にしゃべっているつもりだが、ついつい昔話を繰り返してしまいう頃だ。気を付けよう。

坂本龍馬もまた「話の長い人」だったから年齢の問題でもない。乙女姉さんへ宛てた手紙に長さ5mを超えるものがあるので、普段からよくしゃべっていただろう。

龍馬の長話で有名なのは慶応三年十一月初めに越前福井の宿屋(蓑屋)で三岡八郎(由利公正)と新

国家の財政問題を話し合った時だ。朝の八時頃から深夜十二時頃まで話し込んだのだ。連続十六時間である。三岡も負けじとしゃべったはずだ。無駄な話ではない。日本国の財政方針を決めた極めて重大なおしゃべりだったのだ。お互いに話す内容がたくさんあり、様々なアイデアが飛びかつたと思われる。金銀貨幣に代わる紙幣(太政官札)の発行など、日本の近代化に貢献した大きな長話である。

最近、鳥獣戯画のことを調べていたら『沙石集』という鎌倉時代後期の書物に、高山寺の明恵上人の長話の話が載っていた。

寺を訪ねてきた僧侶に明恵は「解脱の道に入るひとのあるべき

様」について夕方から語り始め(泣きながら)、通夜(よもすがら)語りあかし、次の日も「かたりくらし」鐘が鳴つたので「これはなにの鐘ぞ」と明恵が問うと、答えは「日没」という記述だ。

なんと二十四時間以上も話し続けたのだ。食えず、眠らずの丸一日だ。長い。長すぎる。龍馬・三岡の記録を抜いている。

明恵上人と龍馬の長話は無駄に長いのではなく、頭の中に話すべき内容が山のようにあり、それも多岐にわたり、短い時間では伝えられないほどであったのであろう。

話が長いことを嫌わずに、その中で評価して欲しい。歴史上の人物の研究テーマに「話の長い人」という切り口もあるように思う。



京都市右京区にある桐尾山高山寺の石水院の山門

“話してみるかよ”

龍馬の許婚「さな子と小田切謙明夫妻」
千葉佐那(1)

石川 明美 (山梨龍馬会甲斐援隊 会長)

坂本龍馬の許婚だった千葉佐那のお墓は、山梨県甲府市にあります。そのため甲府では、墓石に刻まれた「千葉さな子」と同様に書いたり呼んだりします。さな子の墓を建てたのは、自由民権家・小田切謙明の妻豊次で、「清運寺」(同市朝日町)の小田切家墓地の中にあります。

小田切謙明は弘化3(1846)年甲府市に生まれ、父と共に自由民権運動に身を投じました。山梨県会議員となった明治14(1881)年に板垣退助を党首とする自由党が誕生すると、県内のトップを切って党員となります。板垣とは甲府来甲以来の知己で、その後第一回、第二回総選挙に打って出ますが、中央政界進出は果たせませんでした。

しかし一方で、謙明は私財を投じて甲府市内に鉱泉二ヶ所を発見し、温泉と町作りに邁進します。鉄道中央線敷設運動も推進した謙明の徳を慕って、町内の人たちは存命中から生き神様「海舟大権現」として崇めました。

明治24(1891)年、中風を病んだ謙明は、板垣の紹介で豊次とともに治療のために東京千住の「千葉灸治院」を訪ね、さな子と出会います。謙明は明治26(1893)年4月に47歳で亡くなりますが、豊次はその後もさな子と交流を続けます。

さな子は明治29(1896)年10月58歳で亡くなった後、末妹はまの夫、熊木庄之助によって谷中霊園に埋葬されますが、豊次は分骨をして小田切家の墓地にお墓を建てました。自然墓石には「千葉さな子墓」裏には「坂本龍馬室」と刻まれています。また、謙明夫妻墓の碑文は板垣によるものです。



千葉さな子の墓
＝甲府市「清運寺」内

第13回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会
テーマ「龍馬の思想と行動」

- 日時 2021年5月22日(土)10:00～17:20(会員総会9:20～)
- 会場 高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
- 定員 60名(参加無料・要申込)

《研究発表》

10:10～ 網屋 喜行 氏(鹿児島県立短期大学名誉教授(「吉田」本家末裔)

「石尾芳久氏の『海南政典』研究と
分析道具のウェーバー『官僚制論』」

11:10～ 山本 修 氏(株式会社便利堂 コロタイプ研究所所長)

「コロナ技術で龍馬の手紙を複製する
～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～」

《特別講演》

13:30～ 大石 学 氏(日本芸術文化振興会 監事)

「坂本龍馬の現代的意義」

《研究発表》

15:10～ 坂本 世津夫 氏(国立大学法人愛媛大学 社会連携推進機構教授
「地域連携コーディネーター」)

「明智光秀と龍馬」

16:10～ 前田 由紀枝 氏(高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長)

「『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える」

※当日は一部リモートによっての発表となります。人数制限もあるため、講演及び発表については、同時あるいは録画配信を考えております。決まり次第HP等でお知らせいたします。

※参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。状況により定員数の増減、また発表形式や時間・内容を変更する場合がございますので、ご了承ください。

お申込み・お問い合わせは下記事務局まで。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp